様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　１日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2011
課題番号：２２６５２０１４
研究課題名（和文）明治大正期美術専門雑誌における西欧美術情報の移入と波及に関する研究
研究課題名（英文）Comparative Studies of the Relationship between Art Documentation and Art Magazines in the Meiji-Taisho Period
研究代表者
今橋　映子（IMAHASHI EIKO）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：２０２５０９９６

研究成果の概要（和文）：

本研究は、明治大正期日本において、西欧美術に関する同時代的情報が、どのようにもたらされたのかを初めて明らかにしたとするものである。第一に、媒介する雑誌の種類と性質、第二に美術情報を収集し執筆する人物、第三に、その情報がもたらした同時代美術への影響や衝撃について、詳細に研究してきた。

従来までは漠然と、雑誌『明星』『白樺』などの文学系雑誌において積極的に紹介されたと考えられてきた美術情報が、実はもっと早い段階から大変に緻密な形で日本に流入し、その情報蓄積と流通に関して、作家森鷗外や、美術批評家岩村透などの人物が積極的に関わっていたこと、またそうした美術情報が日本における西洋美術の言説を直接形成していたことが明らかになった。また、雑誌相互の関係性、各雑誌の個性なども、美術情報の扱い如何によって、逆に明白になることが確認された。

本研究の成果は、今橋映子『日本近代美術批評の成立と展開』（仮題）として出版される。400字詰原稿用紙換算約2000枚に達する規模であり、すでに出版社の企画出版として社内承認され、2013年度中の刊行を目指している。

研究成果の概要（英文）：

This study started with a 2-year plan, of which this is the last year. The study has proceeded smoothly as planned.

Through this research project I substantially clarified the relationship between Art documentation and Art magazines in Meiji-Taisho Period. Especially I chose to focus on several important art journals , analyzing how and why its editors introduced to their readers an enormous information of their contemporary European Arts.

I will compile and publish the results of this study as a book （Eiko IMHASHI, *Art Criticism and Art Management in the Meiji-Taisho Period*, 2012-2013 to be published).

I also was able to provide full, well-organized bibliographic information, which I believe will further contribute to future research in this field.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,200,000	0	1,200,000
２０１１年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,200,000	300,000	2,500,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　芸術学／芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：　美術論・比較芸術・美術情報・美術雑誌・岩村透・森鷗外

１．研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、パリという都市が外国人芸術家にとっていかに神話的存在として表象されてきたかについて、主に比較芸術論的な観点から研究を積み重ねてきた。この分野に関しては――

a.『異都憧憬　日本人のパリ』(1993)
b.『パリ・貧困と街路の詩学』(1998)
c.『〈パリ写真〉の世紀』(2003)
などの単著を上梓し、サントリー学芸賞、渋沢クローデル特別賞、日本写真協会学芸賞などを受賞した。この間研究の一方の軸足は、常に近代日本美術研究にあり、特にパリに留学した日本人画家・写真家たちについての研究を続けている。岩村透論（上記文献 a 所収）佐伯祐三論（上記文献 b）福原信三論（上記文献 c）で提示した成果に関しては、幸い、その後複数の展覧会企画において援用されるに至っている。

また 2002−2004 年には、1900 年パリ万博を機に留学した画家たちが、パリで遺した 3 冊の手書き同人雑誌を共同研究で翻刻、デジタル化し､分析研究をおこなった(『パリ 1900 年　日本人留学生たちの交遊―『パンテオン会雑誌』資料と研究』2004 年）。申請者はこの共同研究で中心的に編輯責任を担ったが、この研究を通じて、明治大正期日本美術を、従来のようないわゆる美術史的作品研究の枠組みに囚われない広い視野から見直すことの重要性を痛感した。

さらに 2007−2010 年の科学研究費補助金（基盤 B）を得て行った課題は「視覚芸術とその文学的言説をめぐる総合研究」であり、前半では「20 世紀フォトジャーナリズムにおけることばの機能」後半では「近代日本美術批評の成立―岩村透を中心に」を研究した。その後半の研究から着想され、萌芽したのが、今回実施した研究課題である。

２．研究の目的

近代日本における美術批評の成立は、単に批評というジャンルの成立を意味するのではなく、当時の日本にとっては未知であった、ギリシャラテン以来の西欧美術史の膨大な知識の移入と整理、ある意味ではそれ以上に重要な、「同時代」西欧美術に関する情報の移入と不可分な関係にある。

同時代の西欧では、印象派からポスト印象派、表現主義、キュビスム等々への急激な転回時期にあたっており、それを「世界同時性」で獲得することが、美術批評家にとっても、画家たちにとっても緊要な課題であった。

その様相を、明治大正期の膨大な雑誌資料から明らかにしようとするのが、本研究の目的である。世界的に見て、美術雑誌の流通や美術情報の移動を解明する研究は明らかに遅れており、日本においても本課題に類する研究はほとんどなかったと言って良い。

３．研究の方法

本研究の方法論的特徴は、美術情報といえば通常思い出される『白樺』『明星』のような文学雑誌はあえて対象とせず、むしろ『東京美術学校校友会月報』『美術新報』『美術週報』のような、美術関係者と深い縁のあった雑誌における美術情報の扱いを、検討することにあった。膨大な記事の収集、美術情報源の特定、美術情報の提示の仕方、そして美術情報が同時代美術界に与えた影響などを

出来る限り明らかにすることをめざし、データを膨大に蓄積した。

一方で、同時代日本の美術雑誌に多大な影響を与えたと推定される、雑誌 *Studio*, *Century Magazine, Gazette des beaux-arts* などにあらわれた美術情報と、日本移入後の情報とを付け合わせる作業も、出来る限り行っている。

さらに本研究の方法論でユニークなのは、通常の美術史研究が、絵画などの「作品」を対象とするのに対し、「美術情報」という、美術と文学テクストの境界的性格をもつテクスト群を、初めて分析の対象とする点であった。そのために、美術情報を単に「情報の断片の集積」というかたちではみなさず、意外にも、文学者・森鷗外や、美術批評家・岩村透などが、なぜこれほどまで積極的に関わったのか、その様相を追究することで、美術情報の蓄積と流通に関する将来的な研究指針を得ることに務めた。

４．研究成果

すでに述べたように本研究は、明治大正期の日本において、西洋美術に関する同時代的情報が、どのようにもたらされたのかを初めて明らかにしようとするものである。第一に、媒介する雑誌の種類と性質、第二に美術情報を収集し執筆する人物、第三に、その情報がもたらした同時代美術への影響や衝撃について、詳細に明らかにすることを目的とした。

二年間の助成期間のうち第一年度は、『東京美術学校校友会月報』『美術新報』『美術週報』などの美術雑誌における美術彙報記事の全てを抜き出し、その後の研究が円滑に行えるように、分類整理、見出しの付加、索引整理などをまずは行った。

第二年度は、上記の雑誌以外にもとりわけ『第二次早稲田文学』に膨大な彙報が含まれている事実を発見し、その情報整理を行った。さらにこれらに影響を与えている海外美術雑誌の重要性がさらに深まったため、それらにおける美術情報発信の在り方についての理論的考察を深めた。

美術情報を発信する人物としては、東京美術学校で西洋美術史を担当した森鷗外、岩村透、久米桂一郎の存在がやはり大変大きく、彼らの著作や美術批評記事との関連性を、引き続き研究中である。

いずれにせよ当初の予想通り、この時代の美術情報の移入の在り方は、単なる情報移入の次元にとどまらず、明治大正美術批評と、美術行政、アートマネジメント的な思考と、膨大な知識背景をもとになされていたことが実証的に証明されただけでなく、そうした情報が美術界をいかに牽引していたかも明確になってきている。よって、本研究は「萌芽」の段階からいよいよ、本格的な著作執筆完成の段階に移行している。

今橋映子『日本近代美術批評の成立と展開』（仮題）は、400 字詰原稿用紙換算約 2000 枚に達する規模であり、すでに出版社の企画出版として社内承認され、2013 年度中の刊行を目指している。内容的に膨大なため、著作として一挙に公開することを目的としているので、敢えて雑誌論文での事前公表を控えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計４件）

① 今橋映子「大学（院）の美術研究と展覧会カタログ」（招待シンポジウム発表）（シンポジウム「“展覧会カタログ”を斬る」、2011 年 12 月 4 日　於：国立新美術館）

② 今橋映子「小林千古とパリの仲間たち――パンテオン会の友情と美術史的意味」（小林千古没後 100 年記念　小林千古と 1900 年パリ・パンテオン会記念講演会、2011 年 11 月 12 日　於：はつかいち美術ギャラリー）

③今橋映子「写真を語ると何か――報道写真研究と展覧の新動向」（ワークショップ「20 世紀フランス文学と写真」、2010 年 11 月 6 日於：東京大学本郷キャンパス）

④今橋映子「1920 年代の都市パリと郊外――佐伯祐三の眼」（招待講演）（関西医科大学第 13 回のぞみ会、2010 年 6 月 5 日、於：リーガロイヤルホテル大阪）

〔図書〕（計１件）

①山田博規・今橋映子『小林万古と１９００年パリ・パンテオン会展　カタログ』（はつかいち美術ギャラリー、2011 年、1-72 頁）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）
〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織

(1)研究代表者：
今橋　映子（IMAHASHI EIKO）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：20250996

(2)研究分担者：なし

(3)連携研究者：なし

以上